聞き手としての行動の母語転移の可能性

－物語伝達時の相づちとうなずきの使用の分析－

半沢千絵美

要　　旨

本稿では聞き手としての言語的・非言語的行動である相づちとうなずきに焦点をあて、学習者が母語（L1）と外国語（L2）で聞き手となる際に、相づちとうなずきをどのぐらいの頻度で、また、どこで使用しているのかを調査した。これまでの研究では、自由会話のデータをもとに相づちの使用が分析されている場合が多かったが、自由会話では発話順番の交代（turn-taking）が起こるたびに話し手と聞き手の役割も交代するため、聞き手の行動のみを比較しにくい。本稿では、英語（L1）と日本語（L2）の物語伝達というディスコースを設定し、4人の中上級日本語学習者に英語と日本語で物語を聞いてもらい、picture-ordering タスクを実施した。相づちとうなずきの頻度と出現位置を分析したところ、全ての学習者にL1とL2で共通する傾向がみられた。また、日本語の相づちの頻度が母語話者よりも高かった学習者に関しても、出現位置はL１の傾向を保持しており、母語転移の可能性が示唆された。

キーワード：　相づち　うなずき　母語転移　聞き手としての行動

１．はじめに

日常生活における会話の形式には、対面形式だけではなく、電話会話、インターネットを使ったチャットなどがあるが、どのような形式においても「話し手」の存在は「聞き手」の存在を生み出す。そして、聞き手の役割を担っている者は静かに話を聞くのではなく、相づちを打ったり、相手の発話を繰り返したり、うなずいたり、笑ったりして会話に参加する。米国の外国語教育ではコミュニカティブアプローチが普及し、外国語としての日本語教育でもコミュニケーション重視の教育がすすめられ、相づちというコンセプトも教科書に取り入れられるようになってきた（Hatasa, Hatasa, & Makino　2010）。しかし、相づちをはじめとする聞き手とし

ての行動は日本語母語話者の実態ですら解明されていない部分が多く、学習者の習得は何を目標とすればいいのか、また学習者にとって習得上何が困難なのかはまだ分かっていない。

相づちだけではなく、うなずきや笑いといった非言語的行動も頻繁に聞き手の行動として現れるが、うなずきは相づちの一種であるという記述があるだけで、多くの研究では研究対象から外されているのが現状である。

本稿では、相づちとうなずきの両方に焦点をあて、日本語中上級学習者が彼らの母語（L1）である英語と、外国語（L2）として学習している日本語でどのように聞き手としての行動を表しているかを分析した。今までの相づちに関する研究には、自然な会話の中での相づちの使用を分析したものが多いが、自由な形式の会話の中では頻繁に話し手と聞き手の役割が交代するため、聞き手の行動のみを適格に分析するのが困難である。また、聞き手としての行動は、話し手の発話量、話すスピード、話題の違いにも影響されるのではないかと考え、本稿では同一人物による同じ物語の伝達を聞き手としての行動を引き出す環境として設定した。

２．　先行研究と研究課題

2.2 相づち

相づちの研究は 80 年代ごろから始まり、頻度や機能、出現位置等の研究がされてきたが、研究結果は一定しておらず、未だ相づちの定義も統一がなされていない。先行研究で頻繁に用いられているのはメイナード（1993）と堀口（1997）による定義であるが、二人の相づちの定義に共通するのは、1）話し手が発話権を持っている間に、2）聞き手が送る、3）短い発話という三つの要素である。メイナードと堀口の相づちの定義は多くの研究者に支持されているが、相づちが話し手の発話権内で起こるという点には異論もあり、聞き手が相づちのような短い発話を発した後に発話を続ける、つまり発話権の交代が起こる場合も分析対象としている研究者もいる（郭 2003、Clancy, Thompson , Suzuki, & Tao　1996）。また、大浜（2006）も出現位置に関連して、これまでの研究では質問に対しての返答に使われる「はい」や「うん」が相づちとみなされていなかったことについて言及している。大浜は、これらの応答詞が使われるのは答えが既に出ている場合が多いことから、応答のためではなく、情報の確認のために相づちとして使われているのではないかと分析している。

これらの問題点は、相づちの出現位置に関係するものであるが、話し手と聞き手の発話順番の交代（turn-taking）が見られる自由会話では避けら

れない現象であり、日常会話では頻繁に起こりうる状況でもある。しかし、本研究ではあえて物語の伝達というディスコースを使用することで、発話順番の交代に関わる現象を回避した。

これまでの相づちに関する研究では主に頻度の分析がなされている。日本語母語話者は相づちの使用頻度が高いと言われており、1分間に15−20回（水谷　1988）、100音節に5.5回（渡辺　1994）相づちを使用していたという報告がある。他言語との比較も行われており、日本語母語話者は英語母語話者よりも相づちを頻繁に使っているというのが、これまでの主な研究結果である（メイナード　1993、大浜　2006）。

Clancy他（1996）は、日本語、英語、中国語の友人同士の会話を8組ずつ分析し、相づちを含むReactive Token[1)]（以下RT）の頻度と出現位置を比較した。その結果、全体的な頻度に関しては英語と日本語は中国語よりも高かったが、英語と日本語に差は見られなかった。また、Clancy他はFord and Thompson（1997）のComplex Transition Relevance Places（CTRPs）という概念を用い、文法的終結部（Grammatical completion point）とイントネーション終結部（Intonational completion point）が重なる場所でのRTの使用を分析した。その結果、中国語と英語ではそれらの終結部のRTの使用が日本語よりも多いことが分かった。Clancy他は、日本語では終結部以外のRTの使用、つまりターン途中の聞き手の反応が多いことが原因ではないかと述べている。

2.2 うなずき

うなずきは非言語的な相づちと捉えられる場合が多いが（大浜　2006）、うなずきと相づちが共通の場所に現れ、同じように機能するかどうかはまだ分かっておらず、うなずきが相づちの一種であるという見解は研究結果を通して証明されたものではない。しかし、うなずきの重要さを示唆する結果はいくつかの研究結果にみられる。

Miyazaki（2005）は相づちとうなずきの頻度を分析し、どちらを多く使うかの比率には個人差があるものの、合計した頻度は同じぐらいになったという結果を報告している。また、メイナード（1993）では、合計60分間の会話データの中で日本語では164回、英語では150回のうなずきが使用されたという結果が出ている。このデータ内の相づちの使用頻度はそれぞれ614回と215回ということをふまえると、英語母語話者にとって、うなずきは聞き手の役割として重要な位置を占めていることが分かる。

2.3 学習者の聞き手としての行動

相づちのみに関するものがほとんどであるが、日本語学習者の聞き手としての行動も研究されている。母語話者が頻繁に打つ相づちは学習者の聞き手としての行動とは違うのではないかという見解（Mizutani　1982）があるが、これまでの研究結果からは、必ずしも学習者の相づちの頻度が母語話者のものより低いということは断定できない。堀口（1997）は上級の学習者、渡辺（1994）は初級、中級、上級の学習者を対象に相づちの頻度を調べ、学習者の相づちの頻度は母語話者のものより低かったと報告しているが、Mukai（1999）の研究のように、上級学習者の相づちは量的には母語話者と変わらなかったという結果も出ている。

日本語学習者の相づち使用が研究課題になっているということは、教育現場、または研究者間に学習者の相づち使用に何か問題点があるという直感的な判断があると考えられるが、学習者が自然な聞き手としての行動を取っていないと思われる原因はまだはっきりとは分かっていない。

2.4 研究課題

本稿では学習者の聞き手としての行動を、L1（英語）と L2（日本語）の違いに焦点をあてて分析し、学習者の L2 の聞き手としての行動に不自然さの要因があるのかを探る。

第二言語習得研究では、言語習得に関わる様々な要因が分析されているが、母語の影響もその一つであり、言語構造や発音など様々な分野で母語転移の可能性が議論されている。言語の使用がどのようにミュニケーションに影響するかを問う語用論においても、母語転移は研究対象の一つである（Kasper 1992）。Kasper は語用論における母語転移を Pragmatic Transfer と呼び、目標言語以外の言語からの影響が学習者の語用論的項目の理解、産出、または学習に影響することと定義している。過去の日本語学習者の相づちに関する研究では、学習者の母語が異なる場合（渡辺 1994）や、母語の記述がない場合もあり、母語の影響が軽視されてきたことが想像できる。しかし、もし日本語学習者の聞き手としての行動が母語に影響を受けているものだとすれば、学習者が習得上困難な点をあらかじめ予測し、具体的な指導目標を立てることが可能になるのではないだろうか。本稿では以下の研究課題に沿って分析をすすめていく。

研究課題１：日本語中上級学習者が L1（英語）と L2（日本語）で物語を聞く際、相づちとうなずきの使用頻度に違いは見られるのだろうか。

研究課題２：日本語中上級学習者がL1（英語）とL2（日本語）で物語を聞く際、相づちとうなずきの出現位置に違いは見られるのだろうか。

以下、研究方法、研究結果、まとめと考察の順に本稿をすすめる。

３．研究方法

物語（narrative story）は「過去に発生した出来事の報告」（李　1999）という広義の定義を用いた。上述したように、自由会話ではなく物語を使用したのは、発話順番の交代を最小限にし、聞き手としての行動を明確に把握するためである。また、話し手の話し方が聞き手の相づちやうなずきに与える影響を最小限にするため、話し手は同一人物が担当し、その話し手が同じ内容の物語を聞き手６人に伝えた。以下、参加者と手順をまとめる。

3.1 参加者とデータ収集の手順

参加者は話し手２名と聞き手８名の、計10名である。表1〜表3は参加者の基本情報を表している。表1の話し手は物語を聞き手に伝達した人物、表2の学習者は日本語と英語で物語を聞いた日本語学習者、そして表3の母語話者は、母語話者の聞き手としての行動を見るために参加してもらった日本語と英語母語話者の情報である。男女差、年齢差の影響を考えて、参加者は全員女性、年齢も１人を除いて全て20代であった。学習者はアメリカ州立大学の日本語クラスに在籍中の学生で、JL1とJL2は３年生、JL3とJL4は４年生に在籍していた。

表１：話し手としての参加者

	年齢	母語	伝達言語	外国語学習歴	外国滞在歴
SP1	24	日本語	日本語	英語：12年	アメリカ：6年
SP2	25	英語	英語	中国語：5年	中国：2年

表２：聞き手としての参加者（学習者）

	年齢	母語	日本語学習歴	在籍クラス	日本滞在歴	話し手との関係
JL1	20	英語	6年	3年生	2週間	初対面
JL2	19	英語	5年	3年生	2週間	初対面
JL3	21	英語	5年	4年生	8ヶ月	初対面
JL4	22	英語	3.5年	4年生	10ヶ月	初対面

表 3：聞き手としての参加者（母語話者）

	年齢	母語	外国語 学習歴	外国 滞在歴	話し手との 関係
NSJ1	24	日本語	英語：10 年	アメリカ：3 年	初対面
NSJ2	27	日本語	英語：15 年	アメリカ：5 年	見たことはある
NSE1	26	英語	ドイツ語：10 年	ドイツ：2 年	初対面
NSE2	25	英語	スペイン語：10 年 ポルトガル語：2 年	スペイン：3 ヶ月 ドイツ：2.5 ヶ月	初対面

データ収集はランゲージラボの個室で行われた。話し手が聞き手に物語を伝えている様子は非言語的行動も把握できるようビデオ録画をした。物語の伝達が終了した後は、聞き手となった人にのみ残ってもらい、Picture ordering タスクを実施した。このタスクは、話し手の体験談を表した 4 枚の絵を正しい順番に並べ、その絵を見ながら自分の母語で物語を筆者に説明するというものである。これは、初対面同士の二人が理由なく物語の伝達を始めるのは不自然なので目的を持たせるためと、聞き手が物語の内容を理解していたかを確認するために行われた。話し手の体験談を採用することで、なるべく自然な環境を作り出そうと試みたが、初対面という人間関係や picture-ordering タスクの使用が聞き手の行動に影響を与え、不自然さが生まれたかもしれないということは否定できない。

3.2 分析方法

録画したビデオは全て文字化し、聞き手としての行動を相づちとうなずきとに分類した。本稿において相づちとは「はい」「そうですか」「なるほど」などの意味を持つ短い発話と「ああ」「ん」「うわ」などそれ自体は意味を持たない短い発話、また「大変でしたね」「ひどいですね。」などの評価や感情を表す短い発話のことである。うなずきの定義は Maynard（1989）のものを使用し、「はっきりと分かる頭の縦の動きで、最低一回は頭を下方に動かし、すぐにそれを元の場所に戻す動き（筆者訳 Maynard 1989, p.161）とした。

話し手が伝えた物語の長さの平均は、日本語の物語が 106 秒、英語の物語が 142.8 秒と差があり、また、それぞれの言語 6 回分の物語の長さにもばらつきがあったため、相づちとうなずきの頻度は 1 分間に使用された数で比較した。

４． 分析結果

4.1 頻度

図１は１分間あたりの相づちの頻度を表している。参加者が少ないため、結果を統計的に比較はできないが、日本語母語話者のほうが英語母語話者より相づちを多く使っていたことはこのグラフから分かる。

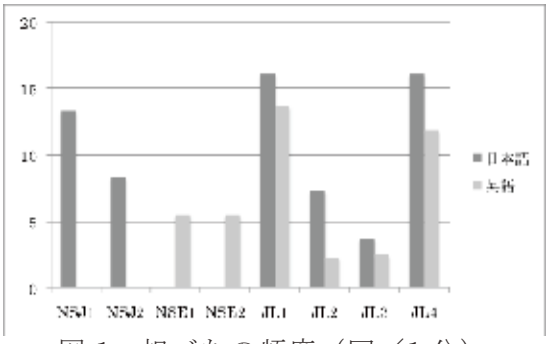

図１　相づちの頻度（回／１分）

そして、JL1ーJL4 の結果を見ると、学習者は日本語で物語を聞く時のほうが英語で物語を聞く時よりも頻繁に相づちを使用しており、さらには、日本語と英語にはある一定の傾向が見られることが分かる。日本語での相づちの頻度が高い学習者（JL1 と JL4）は英語でも高く、日本語での相づちの頻度が低い学習者（JL2 と JL3）は英語でも低くなっている。この結果については、L1 の行動が L2 に影響したという母語転移の可能性と、L2 の行動が L1 に影響を与えたという二つの説明が可能ではないだろうか。

日本語の研究ではないが Tao and Thompson（1991）と Heinz（2003）は L2 が L1 の聞き手としての行動に影響を与えていたという結果をそれぞれ中国語とドイツ語母語話者の相づちの分析から報告している。今回は量的な分析ができないため、可能性があるとしか言えないが、L2 が L1 の聞き手としての行動に与える影響は今後の課題としたい。

図 2 は相づちとうなずきの合計の頻度を表したものである。ここでも学習者の結果には L1 と L2 間で一定の傾向があることが分かる。相づちとうなずきの合計の頻度が高い学習者 JL1 と JL4 は日本語と英語、どちらの環境でも高い頻度を保っている。

また、ここで注目すべきは、JL2 と JL3 の日本語の結果である。相づちのみの頻度を見た場合、この二人は母語話者と比べても、他の二人の学習者と比べても相づちの使用が少なかった。JL1 と JL4 がそれぞれ 1 分間に

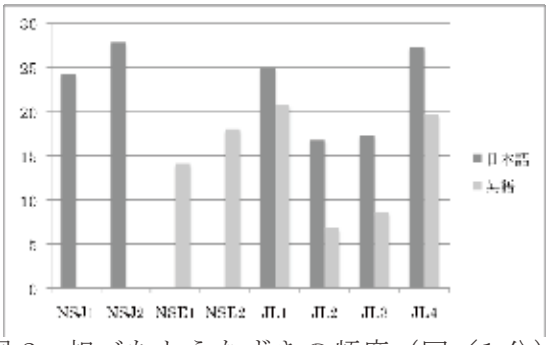

図 2　相づちとうなずきの頻度（回／1 分）

16.1 回ずつの相づちを使用していたのに対し、JL2 と JL3 はそれぞれ 1 分間に 7.3 回、3.7 回と、半分以下の頻度を示していた。しかし、相づちとうなずきの合計の頻度を見ると、学習者間の差が縮まったことが分かる。これは JL2 と JL3 のうなずきの頻度が高かったからだと思われるが、1 分間あたりのうなずきの頻度は、相づちが一番少なかった JL3 で 13.6 回と一番高く、次に少なかった LJ2 も JL1 より多くうなずきを産出していた。この結果より、日本語学習者が日本語で物語を聞く際には、相づちだけではなく、うなずきも高い頻度で現れることが示された。相づちの使用のみを見ると、学習者は「反応が少ない」と思われてしまうかもしれないが、非言語的行動も見ることによって、決してそうではないということが分かる。

図 3 はそれぞれの聞き手が、相づとうなずきをどのぐらいの比率で使ったかを表している。学習者の結果は日本語と英語、それぞれの結果を表している。この結果からも、学習者の L1 と L2 の聞き手としての行動には共通点があることが分かる。相づちをより多く使う学習者と、うなずきをより多く使う学習者の二つに分かれたわけだが、どちらも、L1 と L2 で同じ傾向を見せている。

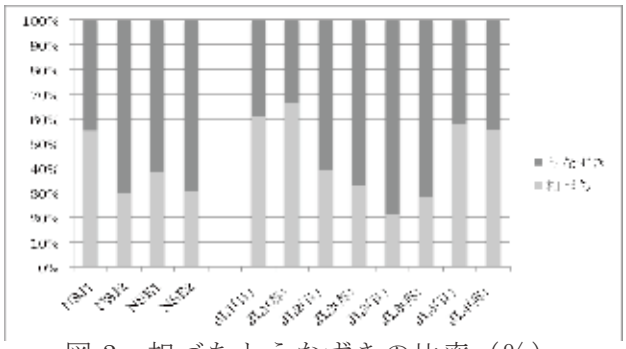

図 3　相づちとうなずきの比率（%）

4.2 出現位置

相づちの出現位置の分析は Clancy 他（1996）を参考にし、文法的終結部とイントネーション終結部の定義も彼らの定義を採用した。図 4 は相づちが文法的終結部とイントネーション終結部が重なる点で起こった割合を表したものであるが、この重なる点を Clancy 他と同様、以下 CTRPs と呼ぶ。

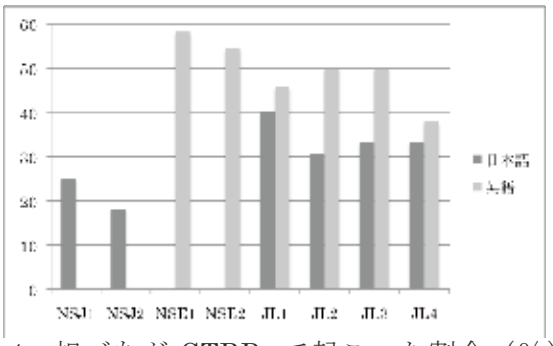

図 4　相づちが CTRPs で起こった割合（%）

日本語と英語母話者の結果を見ると、Clancy 他の結果と同じように、日本語では CTRPs での相づちの使用の割合が低く（平均 21.6%）、英語では高い（平均 56.4%）ことが分かる。Clancy 他の結果では、日本語の平均が 30.8%で、英語の平均が 45.1%だったので、本稿の結果のほうが両言語の結果に差が出たが、Clancy 他の研究では相づちだけではなく RT を分析の基準としているため、直接比較することはできない。

学習者の結果を見ると、日本語と英語両方で、30%以上の相づちが CTRPs で起こっているが、ここで特に注目したいのが、JL1 と JL4 の日本語の結果である。JL1 と JL4 は相づちの頻度が高く、母語話者よりも多く相づちを使用していた（図 1）。しかし、相づちの出現位置を分析したところ、JL1 と JL4 の相づちの出現位置は他の学習者 2 名と同じような傾向を見せ、30% 以上が CTRPs で起こっていたことが分かった。日本語母語話者は 8 割近くの相づちを CTRPs 以外の場所、つまりターンの途中で打っていたのに対し、学習者はターン終結部での相づち使用の割合が高かったということである。

図 5 は相づちとうなずき両方を同様に分析した結果である。うなずきも分析に含めることで、日本語母語話者の 9 割近くの相づちとうなずきが CTRPs 以外の場所で起こっていることが明らかになった。しかし、学習者

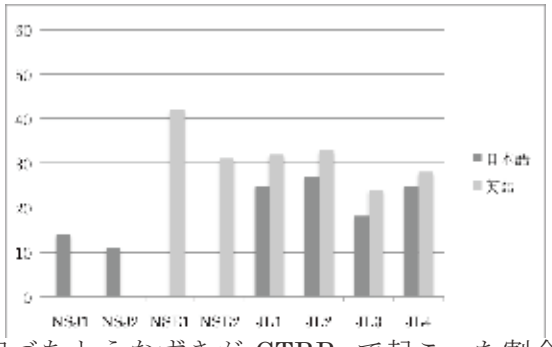

図 5　相づちとうなずきが CTRPs で起こった割合（%）

の CTRPs での相づちとうなずきの使用の割合は依然日本語母語話者に比べて高く、母語話者二人の結果がそれぞれ 13.8%、10.8%なのに対し、学習者の場合は、低くても 17.9%という結果となった。また、学習者 4 人の両言語での傾向を見てみると、頻度を比べた際の結果と同じように、L1 と L2 間でそれぞれよく似た傾向を示していることが分かる。

本研究の日本語・英語母語話者 4 名の結果と Clancy 他（1996）の結果から、英語母語話者は CTRPs で相づち、または相づちとうなずき両方を使用する割合が日本語母語話者よりも高いことが分かった。もし日本語学習者の CTRPs で起こる相づちやうなずきの割合が日本語母語話者のものと比べて高いとすれば、これは学習者の L1 である英語の聞き手としての行動に影響を受けたからだと考えることができるのではないだろうか。だとすれば、学習者が L1 と L2 で似たような傾向を示すことも説明できる。さらなるデータを用いての分析が必要であるが、注目すべき結果である。

5．考察とまとめ

以上の結果をふまえて、以下研究課題 1 と 2 について考察する。

相づちの頻度は 4 人の学習者の間で、L1 と L2 に同じような傾向が見られた。つまり、相づちの使用頻度が高い学習者は英語でも日本語でも高く、低い学習者は日本語でも英語でも低いということが分かり、それは相づちとうなずきの合計の頻度でも同様だった。また、相づちとうなずきの比率を見た結果からも、学習者 4 人は全員 L1 と L2 で物語を聞く際に、同じような比率で相づちとうなずきを使用していた。これらの結果から推測できるのは、学習者は L1 の聞き手としてのストラテージを意識的に、または無意識的に L2 でも使っているかもしれないということであるが、逆方向の影響も否定できない。今回のデータだけではどちらの方向で影響があっ

たのかは分からないが、出現位置の結果と合わせて考えると L1 から L2 への影響があったと考えるのが論理的ではないだろうか。L2 から L1 の影響を検証するためには、データの数を増やすことはもちろんであるが、学習者が日本語を学習し始める前にどのような聞き手としての行動を取っていたかというデータも必要となり、これは今後の研究課題としたい。

次に相づちとうなずきの出現位置に関する結果だが、相づちとうなずきの場所にも L1 と L2 で共通した傾向が見られた。Clancy 他（1996）は英語母語話者のほうが高い割合で CTRPs で RT を使用していたと報告しているが、本稿では学習者の日本語での聞き手としての行動にもそのような傾向が見られた。また、出現位置の結果において特徴的だったのは、どの学習者においても、日本語の CTRPs での相づちとうなずきの使用の割合が英語よりも低いということである。これは言語の違いに因るものかもしれないが、学習者が L1 と L2 で何らかの違う傾向を見せた可能性もある。学習者が日本語で聞き手となった際、意識的に、または無意識的にターン終結部以外での相づちやうなうずきを使用しているとすれば、それは学習者の聞き手としての行動の習得を示唆するものかもしれない。

これらの結果は日本語での聞き方を指導する際に有益な情報である。英語では文の終わりやイントネーションが下がるところで相づちやうなずきが打たれる場合が多く、学習者が日本語でも同じように相づちやうなずきを使っているという事実が何らかの不自然さを生み出しているかもしれないからだ。Mizutani（1982）は学習者の適切な相づちの欠如が、会話の相手である日本語母語話者に不快感を与えるかもしれないと言及しているが、この「適切」さは、頻度ではなく、ターン途中の相づちやうなずきからきているのではないだろうか。

聞き手の行動は伝達すべき内容を伴わないという性質から、付随的な要素、まさに‘back’ channel だと思われがちである。そして、文法的、または発音の間違いのように伝達内容に直接影響しないことから、学習者はフィードバックを受ける機会があまりない。また、正しい答えが存在しないことから、教室活動でも教えにくい項目の一つである。しかし、学習者の母語での聞き手の行動と、日本語母語話者の聞き手の行動を比べて、学習者の「気づき」を促すことは可能である。実際に会話に参加している時には気づきにくい聞き手の行動などは、ビデオ撮影をした会話の様子を見せたり、学習者に実際に文字起こしをさせることで、学習者の聞き手の習得を効果的に進めることができるのではないだろうか。

本稿の結果より、聞き手の行動の母語転移の可能性が示唆された。しかし、検証のためにはさらなるデータの数と、異なる母語のサンプルが必要である。異なる L1 を持つ学習者のデータが増えることで、聞き手としての行動の習得研究がより具体的、実践的なものになることを期待したい。

注

[1] Clancy 他（1996）は相づち(backchannels)、反応を示す表現(reactive expressions)、反復(repetition)、ターン開始時にみられる短い表現(resumptive openers)、聞き手による会話の完結(collaborative finishes)の五つを RT として分析に含めた。

参考文献

大浜るい子（2006）『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』渓水社

郭末任（2003）「自然談話に見られる相づち的表現—機能的な観点から出現位置を再考した場合—」『日本語教育』118, pp.47-56.

堀口純子（1997）『日本語教育と会話分析』くろしお出版

水谷信子（1988）「あいづち論」『日本語学』7-12, pp.4-11.

メイナード、泉子 K.（1993）『会話分析』くろしお出版

李麗燕（1999）「日本語母語話者の雑談における「物語の開始」:発話順番のやり取りとの関係を中心に」『日本語教育論集 世界の日本語教育』9, pp.221-239.

渡辺恵美子（1994）「日本語学習者のあいづちの分析—電話での会話において使用された言語的あいづち」『日本語教育』82, pp.110-122.

Clancy, M., Thompson, M., Suzuki, R., & Tao, H. (1996). “The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin” *Journal of pragmatics,* 26, pp.355-387.

Ford, C.E., and Thompson, S.(1997). “Interactional units in conversation: syntactic, intonational, and pragmatic resources for the management of turns” In Ochs, E., Schegloff, E., & Thompson, S. (Eds.). *Interaction and grammar.* Cambridge: Cambridge University Press.

Hatasa, Y.A., Hatasa, K., & Makino, S. (2010). *Nakama1.* Heinle.

Heinz, B. (2003). “Backchannel responses as strategic responses in bilingual speakers’ conversations” *Journal of pragmatics*, 35, pp.1113-1142.

Kasper, G. (1992). “Pragmatic transfer” *Second Language Research,* 8-3, pp.203-231.

Maynard, S. K. (1989). *Japanese conversation: Self-contextualization through structure and interactional management.* NJ: Ablex Publishing Corporation.

Miyazaki, S. (2005). *Japanese women's listening behavior in face-to-face conversation: The use of reactive tokens and nods.* A dissertation submitted to Michigan State University.

Mizutani, N. (1982). "The listener's response in Japanese conversation" *Sociolinguistics Newsletter,* 13-1, pp.33-8.

Mukai, C. (1999). "The use of back-channels by advanced learners of Japanese: Its qualitative and quantitative aspects" *Japanese-language education around the globe,* 9, pp.197-219.

Tao, H., Thompson, S.A. (1991). "English backchannels in Mandarin conversations: A case study of superstratum pragmatics 'interference'" *Journal of pragmatics*, 16, pp.209-233.

（アイオワ大学）